

2005 年度卒業論文

「ボランティア精神と は何か」

学籍番号 1710020485

経営学部経営学科 4年15組50番 渡邊 高亮
小関ゼミ

はじめに	2
第 1 章 「ボランティア」の定義	4
第 2 章 宗教的観点から見るボランティア精神	6
第 1 節 キリスト教におけるボランティア精神	7
第 2 節 仏教におけるボランティア精神	12
第 3 節 イスラムにおけるボランティア精神	13
第 3 章 ボランティア教育	15
第 1 節 ボランティア活動と奉仕活動の違い	16
第 2 節 ボランティア教育の意義	17
第 3 節 現代のボランティア教育	19
第 4 節 考察	22
第 4 章 偽善	23
第 1 節 「善」と「偽善」	23
第 2 節 ボランティアは偽善者なのか	25
第 5 章 終章 - ボランティア精神とは何か -	28
おわりに	30

はじめに

筆者はボランティアや NPO の分野を扱うゼミに所属している。筆者がなぜこのようなゼミを選んだかという、ボランティアや NPO の活動に興味を示したからではない。ある授業において NPO の活動について初めて学んだとき、やっていることに賛同したのではなく、理解できなかったからだ。なぜボランティアをするのか、筆者には理解できなかった。それまで、筆者自身ボランティアについてまったくといっていいほど考えたことも興味をもったこともなかった。これを契機として筆者はボランティアや NPO の活動内容よりも、ボランティアや NPO に携わる「人」の考えに興味をもつようになった。筆者とそういった人々はどこが違うのか？ どういうことをすればボランティアや NPO に興味をもつのか疑問を抱いた。そして、卒業論文においてボランティア精神というテーマを選んだ理由は、大学生活の集大成として今まで疑問に思っていたものに対して何か自分なりに曲がりなりにも結論を出したいとも思ったからである。

日本は財政難に陥っているのは周知のとおりである。17 年度末には日本の公債残高は 538 兆円程度になると見込まれ、国および地方の長期債務残高（公債残高、借入金残高等の国の長期債務と地方の債務残高とを合計したもの）は 774 兆円程度に上ると見込まれている。¹また財政赤字を反映して、日本の公債依存度は飛び抜けて高くなっている。日本が 44.6% に対し、アメリカ 17.0%、イギリス 8.1%、ドイツ 16.8%、フランスは 16.7%²となっている。このような状況で国に従来どおりの社会保障を期待するのはもはや不可能といえる。また国や地方自治体がボランティアや NPO といった公共性の高い第三セクターに期待をするのは必然といえる。私も今まで以上に、ボランティアや NPO が重要な役割を担い、社会的にも不可欠な存在となることに異論はない。つまり、筆者はボランティアや NPO の活動自体には社会的な価値があると認めている。

しかし、これは筆者のわがままだと思うが、やりたいという興味が湧かな

¹ <http://www.mof.go.jp/jouhou/syukei/sy014/sy014d.htm>

² * 日本は 2004 年度、イギリスは 2002 年度、その他は 2003 年度のデータ
資格試験研究会 公務員試験『速攻の時事』 実務教育出版 2005 年 p.87

いのである。なぜならどの非営利組織にも共通し、その根底にある考えであるボランティア精神が、筆者には欠如しているからだ。ボランティアに興味がないと宣言することは私自身、非常に勇気が必要であった。なぜなら、筆者はボランティアや NPO を主に扱うゼミに所属しているし、ボランティアをやっている人たちに対して劣等感や引き目を感じていたからである。日本には、「本音」と「建前」という言葉があるが、今まで私は「本音」を隠し、「建前」と捉えられるような振る舞いをしていたと思う。そのほうが身を縮めるよう思いをする必要がなく、楽だったからである。筆者はこの論文を通じてなぜボランティア活動に興味がないのかという筆者自身の「本音」の部分に焦点を当て、ボランティア精神について考えたいと思う。

筆者はボランティアや NPO の活動を批判する気はない。ボランティアや NPO に興味を持っている側からのボランティア精神の考え方や捉え方とそれらに興味がない側つまり、自分の考えを比較するような手法を一部用いている。そのため、ボランティアや NPO の活動に携わっている方にとって不愉快な表現や考えがあると思うがご了承願いたい。また、このような考えもあるのかというような、広い心を持ってこの本文を読んで頂けたらで幸いである。

第 1 章 「ボランティア」の定義

近年、誰もが「ボランティア」という単語を耳にしたことがあるだろう。しかし、「ボランティア」の意味を説明できるだろうか。筆者は説明できない。なぜなら、ボランティアという概念そのものが人の価値観に依存しているからである。つまり、「ボランティア」の概念が抽象的で、人によって「ボランティア」の定義が異なるのである。そこで筆者は、「ボランティア」という単語を自分なりに定義しようと思う。

一般的に「ボランティア」とは、英語における原義で、名詞としては、志願者、有志者、篤志家。広く、自発的に物事を行う人。(専門家に対して、「アマチュア = 素人」という意味もある。) Volunteer 志願兵。法律用語では、無償労務提供者。という意味もある。動詞では、1)自ら進んで / 自発的に、申し出る。2)兵役に志願する。志願兵となる。日本語では(広辞苑での説明例)義勇兵、自ら社会事業などに参加する人。「奉仕者」や「奉仕する」³というように定義されている。

しかし、これだけの説明で「ボランティア」の定義について理解できるだろうか。「ボランティア」というのは我々にとって曖昧な概念ではないだろうか。それは「ボランティア」とは外来語であって、言葉の奥にある微妙なニュアンスが伝わりにくいし、人によってそのニュアンスも違って来るからである。

「ボランティアは見返りを求めてはいけない」とある人は主張する。これは「ボランティア」は無償なものであるという意識が反映されているからであろう。有償・無償を金銭的な枠組みで捉えれば、無償でなければならないという主張は理解できる。しかし、現に「有償ボランティア」が存在する。「有償ボランティア」はボランティアではないのだろうか。難しい問題である。筆者自身、「ボランティア」は無償なものというイメージが強い。なおかつ、私は有償ボランティアとアルバイトの違いを説明できない。そのため、本論文において、「有償ボランティア」は「ボランティア」の定義からはずすこととする。

話を元に戻すと、「ボランティア」が見返りを求めないというのは可能なので

³ 編者・遠藤克弥 『現代国際ボランティア教育論』 勉誠出版 2004年 p.105

あろうか。私は不可能であると思う。見返りには、金銭的なものばかりでなく、精神的なものつまり、自己満足などといったものも含まれるからである。

この論文における「ボランティア」の定義づけをまとめると、ボランティアとはまず、本人の意思が尊重されるのが前提である。そのうえで、自発的かつ(金銭面において)無償で社会に貢献する人、あるいは行為そのものをさすこととする。賛否両論あると思うがこの論文において「ボランティア」を以上のように用いて、ボランティア精神とは何かを探索しようと思う。

第 2 章 宗教的観点から見るボランティア精神

筆者は宗教の考え方の中には今日おける、「ボランティア精神」と共通する概念が含まれているのではないかと仮定している。そのため、この章では世界三大宗教と呼ばれている、キリスト教、仏教、イスラムを取り上げ、それぞれの宗教においてボランティア精神とはどういうものなのか、またどうあるべきなのかを考察する。

第1節 キリスト教におけるボランティア精神

古代キリスト教における「隣人愛」

キリスト教におけるボランティア精神の理念に当てはまるものは、やはり「隣人愛」ではないだろうか。「隣人愛とは、困難にあっている人のことで、それが知人であるかどうかは関係がない。その人に無条件に助けの手を差し伸べることが、隣人を愛するということである。」⁴この隣人愛という概念がキリスト教を普及させる上で重要な役割を果たしたのは歴史的観点から明らかである。古代西洋社会にユリアノスという皇帝がいた。彼はいったんキリスト教帝国になったこの世界の全体をもう一度ひっくり返し、いわば歴史を逆行させて、非キリスト教的ギリシャの伝統に立ち戻ろうとした、それも、最高権力者たる皇帝の権力を持って、何とかこの世界全体をもとにもどそうとした⁵。しかし、彼は皇帝になって二年間、むきになって、古典ギリシャ文明の復興に努めたが、それがまったくむなしい努力だということ嫌というほど思い知らされた。いまや人口の多数を占めるキリスト教徒の側からの反対、反抗はあまりにも根強く、もはや肯定の力をもってしてもどうにもならなかった⁶。また、ユリアノスはキリスト教に拮抗するために、正直にキリスト教の現実を見、評価しようとした⁷。そして、ユリアノスが当時のキリスト教の長所をどの点に見たかという、他

4 中田豊一『ボランティア未来論』 参加型開発研究所 2000年 p.141

5 田川建三『キリスト教思想への招待』 勁草書房 2004年 p.127-128

6 田川建三 前掲書 p.130

7 田川建三 前掲書 p.129

社に対する人間愛の実践としての救護事業、死者の弔いの丁寧さ、真面目な生活倫理⁸の3つを挙げている。その3つの中で、ユリアノスが重要視しているのが、「人間愛」である。古代社会のキリスト教の救護事業には、旅人や亡命者などの「よそ者」に一宿一飯を提供することが含まれる。古代において、一般人にとってそれらを確保することは重要であった。田川建三はおそらくこの時代のキリスト教は、相手がクリスチャンでなくても、困っている人を助けることをしただろう⁹と推測する。なぜなら、ユリアノスがそれを真似して自らも「救護所」をつくらうとしたからである。ユリアノス自身がそれをキリスト教の活動の目立つ特色として捉えていたに違いない。また、田川は古代キリスト教の救護事業が、たまたま困っている人を見て、クリスチャンが個人的な善意で助けてあげました、というような水準ではない¹⁰と主張する。ここでいわれているのは、いわば教会の組織、事業として作られ、しっかり運営されている場所、機能である¹¹。キリスト教会とはこういうことをする場所なのだ、という目的意識があって、積極的に取り組むのでないと、運営不可能である¹²。そしてまた、こういうものは、単に制度として維持していきましょう、というだけでは維持できない。むしろ、キリスト教とはこういうことをするものなのだ、という基本的な了解が、信者たちの間に常に生きていないと、できることではない¹³。キリスト教会のあらゆる側面、ここの信者の生活の様々な局面において、それにつながる姿勢が通っていないと、こういうことはできない¹⁴のである。つまり、古代キリスト教の「隣人愛」という概念が、民衆に受け入れられ、それ自体がキリスト教の核となっていたといえる。

中世における「隣人愛」

⁸ 田川建三 前掲書 p.125

⁹ 田川建三 前掲書 p.126

¹⁰ 田川建三 前掲書 p.127

¹¹ 田川建三 前掲書 p.127

¹² 田川建三 前掲書 p.127

¹³ 田川建三 前掲書 p.127

¹⁴ 田川建三 前掲書 p.127

中世においても、「隣人愛」の精神が人々を動かした。シュヴァーベンの十二個条である。その第二条は十分の一税について記されている。旧約聖書のユダヤ教社会で確立していた制度で、全収穫物の十分の一は税金として納めなければならないという、神の事柄のための税金である。シュヴァーベンの農民たちは、これについて、まず宣言する、「これは神に対してささげられるべきもの、また、神の者たちに対して分け与えられるべきものである。」「神の者たちに対して分け与えられる」というのは、つまり、特定の支配者の利益ではなく、すべての住民に還元されねばならない¹⁵ということを行っているのである。これは、十分の一税は宗教税であるから、キリスト教が昔から言ってきたことのために使おう、ということになる。彼らはキリスト教が伝統的に言ってきたことのうちで最重要なことは、この社会の中に見出される貧しい者、乏しい者を支えることだ、と理解していたのである¹⁶。

また、中世後半全体にわたって、都市市民の自治自由を求める運動の基本理念は「共通の利益」であった、と言われる¹⁷。「共通の利益」とは、日本語では「社会福祉」と訳される。特定の支配層に利益が集中することは許されないので、都市市民の自治とは、ここに生きるすべての人間の役に立つように都市が運営されないといけない¹⁸という基本理念が確立したのである。出発点においては、「教会」という小さな信者の集団の中でしかあてはまらない倫理的目標として考えられていたことが、こうして、中世のキリスト教社会を通じて、社会全体の目標となっていった¹⁹のである。

シュピタール

キリスト教社会においては、オスピスが発達した。オスピスとは、「救護所」

15 田川建三 前掲書 p.158

16 田川建三 前掲書 p.160

17 田川建三 前掲書 p.160

18 田川建三 前掲書 p.161

19 田川建三 前掲書 p.161

のことである。ユリアノスの古代だけでなく、特に中世キリスト教社会において発達した。この段階になると、キリスト教は異教世界の中の少数者の場所ではなく、社会全体がキリスト教になった。²⁰シュピタールはオスピスのドイツ語訳である。では、シュピタールをつくったのは誰かという、支配権力者、封建領主の中で、比較的良心的な人々であった。シュピタールを寄進した例として、大ブルジョアのアウグスブルクのフッガー家やニュルンベルクのグロス家などが挙げられる。寄進する人たちは、建物だけでなく自分たちの不動産、具体的には農地を寄進した。なぜそうするのかという、シュピタールがそういう土地などの不動産を所有することになれば、そこからあがる収益で経常経費をまかなうことができる²¹からである。シュピタールの存在意義というのは、困窮している人々の役に立つことである。そのため、シュピタールは存続しなければならぬのである。

なぜ、経済的に成功したものが社会貢献しようとするのかという、ある程度以上豊かになると、その豊かさを社会に還元しないのは罪だ、という意識にかられるからである²²。なぜそのような意識にかられるのだろうか。その理由の一つとして、イエスが語った譬え話、「貧乏人ラザロ」の話が挙げられる。登場人物は一人の金持ちと貧乏人ラザロである。話の内容を端的に示すと、金持ちは有り余るお金を持っていたにもかかわらず、目の前に飢えていた貧乏人ラザロに何もしなかったため、金持ちは死んだとき地獄に墮とされ、ラザロは神の憐れみにより天国へ導かれたという話である。中世キリスト教では、この感覚が強く支配していた。²³田川はこのように主張する。「自分の構成を心配するから寄進した、というだけのことではあるまい。それらの金持自身もまた、同じ価値観を共有していたのである。ある程度以上多くの収入がありすぎたら、それはもう、本当は自分のものであってはならない。自分のものであってはならないのであれば、「みんなの役に立つこと」に寄進しようということになる。

²⁰ 田川建三 前掲書 p.165 - p.166

²¹ 田川建三 前掲書 p.173

²² 田川建三 前掲書 p.168

²³ 田川建三 前掲書 p.184

中世キリスト教社会は、そういう価値観を人々の間に育てていた²⁴。」確かに、中世キリスト教社会において、人々の価値観にキリスト教の価値観が反映されていたということができる。

現代のキリスト教の「隣人愛」

筆者は、「隣人愛」は現代においてボランティア精神の一部、もしくはそのものに置き換えられていると考える。「隣人愛」について、田川は「現代ヨーロッパ社会においても、非常にしばしば、もはや「キリスト教」の名前とはまったく関係のないところでも、この姿勢と精神が生きているのを多く見出すことができる」²⁵と述べ、中田豊一も自らの著書「ティア未来論」の中で、「欧米社会において NGO の誕生の母体となり、現在も理念と活動を下支えしているのと基本的には同じもの、すなわちキリスト教の精神文化であると考えても差支えなからう。」²⁶と述べている。つまり、「隣人愛」というキリスト教の教義は現代も西欧人の考え方の基盤となり、ボランティアをする人々の支えとなっていると捉えることができる。中田は日本のボランティアもキリスト教の影響を受けていると主張する。「日本においても近代的な社会事業の多くがキリスト教によって起こされ、なおかつ、戦後の日本のボランティア的な福祉事業および NGO 活動もキリスト教関係者にリードされてきた。」²⁷また、同氏は「海外援助の世界だけに限れば、おそらく半数近くが、キリスト教関係者にちがいない。私の場合も、カトリックの宣教師との出会いが、この世界に足を踏み入れる最大のきっかけだった。阪神大震災における組織的なボランティア活動を主導し支えていた中にも、キリスト教関係者のなんと多かったことか。全ボランティアグループの三分の一や四分の一を占めていたのではないだろうか」²⁸とも語っている。

²⁴ 田川建三 前掲書 p.185

²⁵ 田川建三 前掲書 p.186

²⁶ 中田豊一 前掲書 p.130

²⁷ 中田豊一 前掲書 p.136

²⁸ 中田豊一 前掲書 p.136

ボランティアをする人にとってキリスト教には求心力や、魅力があるのかもしれない。中田は「社会活動に長く携わる中で、キリスト教にエネルギーの供給源を見出したものも私の周りには少なからずいる」²⁹と言う。そして同氏は「社会のために働きたいと言う希望を持つ若者がその精神的よりどころとしてキリスト教を選び、そこを活動の足場にして、意義のある仕事をした。その結果として、信徒人口からすれば考えられないような影響力を、キリスト教が持つようになった³⁰」とキリスト教の求心力、魅力を分析する。

現代の「隣人愛」の対象となる範囲は以前に比べ、拡大している。エルサレムの原始キリスト教団の、多分、ほぼまったく実現していなかった「理想」から話が始まって、徐々に、実際に実行するものとなり、その「自分たち」の範囲も、小さな宗教集団から、周りの人々へ、そして、町村の地域共同体へ、都市自治へ、と広がっていった³¹のである。そして、その意識はさらに、世界中に広がるうとする。世界のどこかに、食えずに困っている人がいたら、私は安心して眠ることができない、という意識へと³²範囲が拡大しているのである。それゆえ、現代において「隣人愛」が困難に陥っている人を助けるという定義が成立するのである。

第2節 仏教におけるボランティア精神

仏教におけるボランティア精神と捉えるが概念は、やはり「慈悲」以外にないだろう。慈悲はあらゆる生きとし生けるものをあわれむ思想³³である。慈と悲がどう違うのかというと、慈は積極的に利益と安楽を増すこと、それに対して悲は、不利益と苦を除去すること³⁴を意味する。梅原は、著書「仏教の思想」の中で、「慈悲というものは、釈迦を襲った根本的勘定であるとよいかもしれませ

²⁹ 中田豊一 前掲書 p.137

³⁰ 中田豊一 前掲書 p.137

³¹ 田川建三 前掲書 p.186

³² 田川建三 前掲書 p.186

³³ 増谷文雄 梅原猛 『仏教の思想 知恵と慈悲<ブツダ>』 角川書店 1968年 p.274

³⁴ 増谷文雄 梅原猛 前掲書 p.258

ん。何ゆえ釈迦は出家したか。それは生とは何か、死とは何かという形而上学的問題ゆえでもありましょう。しかし、出家の動機はそれと同時に、衆生への哀れみであります。多くの生きているものが苦しんでいる、その苦しみから衆正をどうしたら救えるかということです³⁵。」そしてまた、同氏は「釈迦が、彼のさとりを自分だけにとどめずに民衆のもとにもたらそうとしたのは、彼の慈悲ゆえでありました。苦悩に呻吟する民衆を、その苦悩から救ってやる、それが釈迦の悲願でありました³⁶。とも述べ、慈悲において仏教の本質を見出すことができるのではないだろうか。

慈悲には主体と客体という構造がある。つまり、慈悲を与える側と与えられる側に分けられるのである。慈悲の主体は人間、そして客体は衆生³⁷である。衆生とは人間を含めたすべての動植物のことである。客体、つまり受け手が衆生であること異論がないだろう。主体の側は、単なる人間であってはならない。すでに苦を超えた境地に達していなければならないのである。苦を克服したものが、苦境にたたされているものを、あわれみ悲しみ、それを苦から救い出し、楽を与えようとする³⁸。つまり、慈悲の主体となる人間が、客体となる、すべての動植物を思いやり、助けてあげるとというのが慈悲の本質であり、ボランティア精神と共通している部分なのではないだろうか。

第3節 イスラムにおけるボランティア精神

筆者にはイスラムとは、仏教やキリスト教といった他宗教と比べ、特殊な世界観をもつ宗教というイメージがある。イスラムは、諸宗教間に原理的対立を認めない日本の風土とは異質の一神教の原理を貫いて³⁹いて、日本の宗教的風

³⁵ 増谷文雄 梅原猛 前掲書 p.258

³⁶ 増谷文雄 梅原猛 前掲書 p.258

³⁷ 増谷文雄 梅原猛 前掲書 p.260

³⁸ 増谷文雄 梅原猛 前掲書 p.260

³⁹ 加賀谷寛 『イスラム思想』 大阪書籍 1986年 p.13

土は仏教も含めてどちらかというところ「人間」中心主義的である⁴⁰のに対し、イスラムは明確な「神」中心主義の宗教⁴¹である。また、宗教を個人の良心の問題に限定して、国家や公共機関から切り離す近代の世俗主義の考えもイスラムにはなじ⁴²まない。政治と宗教を切り離すわが国の基本的立場も、イスラムのこの立場と相容れないと解釈⁴³できる。このように、根本的にイスラムは日本の構造とまったく異なるため、筆者自身イスラムに対し、違和感というような戸惑いを覚える。

イスラム思想では宗教とは心で振興するだけでなく、生活で実践しなければ正しい救いに至ることができないと考えられて⁴⁴いるため、コーランやイスラム法に基づき、イスラム教徒は行動する。つまり、他宗教には本人の意思にゆだねるといような曖昧なものが存在するが、イスラムにはそれらの規則の遵守が絶対であり、それらは人々の生活に大きな影響を与えている。そのため、ボランティア精神に共通するイスラムの概念が見当たらない。しかし、概念ではないが、制度として、ボランティアがイスラムには存在する。

イスラムにはザカートという制度が存在する。ザカートは喜捨を意味する。イスラム法では最も基本的な実践の礼拝と並んでザカートの実行が重視されて⁴⁵いる。我々が獲得する財産や所得は、個人の所得に属する限り不浄であり、財や所得は本来、神による委託と考えなければならないという考え⁴⁶に基づいているためである。

イスラム法ではザカートが課せられる財は現金収入、家畜、果樹、穀物、商品など⁴⁷で、ザカートの収入を配分され支給されるものは、コーランに記されているように「両親と親類縁者、孤独と貧しいもの、旅行者」⁴⁸となっている。

40 加賀谷寛 前掲書 p.13
41 加賀谷寛 前掲書 p.13
42 加賀谷寛 前掲書 p.17
43 加賀谷寛 前掲書 p.17
44 加賀谷寛 前掲書 p.40
45 加賀谷寛 前掲書 p.58
46 加賀谷寛 前掲書 p.58
47 加賀谷寛 前掲書 p.59
48 加賀谷寛 前掲書 p.59

ザカートの用途はこのようにはっきりと定められているのである。イスラム法ではザカートは義務的行為である。これに対し、サダカートという喜捨を自発的に行うものを表す言葉がある。このようにイスラムは、コーランやイスラム法によって喜捨が義務付けられている。そのため、人々は喜捨をすることは当たり前であるから、人々は人助けを意識せずに、結果的に人助けしている。おそらく、このような形が理想なのかもしれない。イスラム社会においてボランティアは社会のシステムの一部として組み込まれ、機能していると捉えることができる。サダカートが、イスラム社会におけるボランティアのひとつの形といえるのではないだろうか。

第3章 ボランティア教育

近年、日本においてボランティア教育の重要性が叫ばれている。行政が主体となり、積極的にボランティア教育に力を入れている。なぜそのようなことを

するのか、ボランティア教育は意味があるのか、本章ではそのようなことを考えたいと思う。

第1節 ボランティア活動と奉仕活動の違い

まず、ボランティア活動と奉仕活動が同じ意味として用いられることが多いという現状がある。ボランティア活動を、日本では過去に「奉仕活動」と訳したこともあった。このため、現在も依然として「奉仕活動」のニュアンスが根強く残っている。学校教育においてもボランティア活動と「奉仕活動」の混合が見られる。ボランティア活動と称して全生徒を半強制的に動員して、校内清掃や河川の清掃に学校行事として取り組んでいるケースも多くみられる。このように、自発性を伴わない公益活動をボランティア活動と混同している事例も少なくない⁴⁹。要するに、ボランティア活動には自発性が伴わなければならない。一方、奉仕活動においては、自発性はもちろん半強制的にやらせることも了承されるのである。

筆者も小・中学生時代、学校周辺のごみ拾いや廃品回収の手伝いといった奉仕活動を体験したことがある。正直、強制的なものという感覚があった。勉強が嫌いだったため、教室で国語や数学など机に向かって勉強するよりはましではあったが、苦痛を伴うつまらないものであった。しかし、学ぶことは少なくともあった。ごみ拾いをした際、他人が捨てたごみをなぜ自分が拾わなくてはいけないのだろうと自問しながらも、「ごみのポイ捨ては人に迷惑をかけることになる。ごみのポイ捨てはやめよう」と思った記憶がある。しかし、奉仕活動を体験したからといってボランティアに興味をもつことはなかった。

学校でボランティア活動を導入することは難しいことではないだろうか。なぜなら、学校における教育は集団行動を求めるため、教育そのものが画一化せざるを得ない。生徒の自発性に委ね、行動させることは、高校生であればある

⁴⁹ 監修・岡本栄一 『ボランティアのすすめ』 ミネルヴァ書房 2005年 p.24

程度大丈夫だと思うが、小・中学生に関してはいささか不安である。また、生徒の自発性に委ね、行動させることは、現場の教師の負担が増え、従来の教育ができなくなる可能性がある。なぜ、教師の負担が増えるかというと、ボランティア教育は生徒の自発性を尊重するわけだから、生徒がやりたいボランティアをやらせることがまず優先される。つまり、各々の生徒が、それぞれ異なる分野のボランティアに興味もつと、教師はそれぞれの生徒にあった対応をする必要性が出てくるからである。

仮にボランティア活動を導入するのであれば、教育そのものを抜本的に見直す必要がある。従来の教育というのは画一的な色合いが強かったが、ボランティア活動を重要なものと位置づけるのであれば、教える側の人数を増やしたり、生徒のさまざまな要望にこたえるのは実質不可能なため、教師が前もって生徒にやってもらうボランティアをいくつか選んでおき、その中から生徒に自分のやりたいボランティアを選ばせるといったことを行う必要がある。

しかし、ボランティア活動の学習スタイルに、大きな問題が生じる。この学習スタイルはボランティアに興味のない生徒が淘汰される危険性をはらんでいる。ボランティア活動の学習スタイルは、生徒の自発性を尊重するにもかかわらず、ボランティアに興味のない生徒には強制を強いるという側面を持ち合わせているからである。ボランティアに学生全員が興味をもつということはありません。周囲の人間がいくらボランティア活動に力を入れようとしても、それをやる当事者、すなわち生徒が、強制を強いられていると感じたら、それは奉仕活動なのである。

第2節 ボランティア教育の意義

市民社会の形成過程においてボランティア人口を増加させるために、国を挙げてボランティア教育に力を入れるのは重要なことである。これはボランティ

アに賛同する側の主張であろう。しかし筆者は立場が異なり、日本のボランティア教育に抵抗を感じている。財政難に陥っている行政は、現状の社会保障制度では、多様なニーズにこたえることができないと判断し、行政では補充できない福祉サービスをボランティアや NPO といった第 3 セクターに期待を寄せているという側面がある。そのため、ボランティアに携わる人口を増やすために、「ボランティア」という言葉を発して、アピールしているのではないかと思ってしまう。行政側の他力本願とでもいうべき考えが見え隠れするのである。筆者にはボランティア教育というのが、大人社会のつけを子供たちに払わせようとしているように思える。大人は、人間関係が適切に維持できない、集団行動が苦手、親友がいない、自己中心的、そして現実回避的であるなど⁵⁰と若者を批判しているようだが、果たして若者だけにいえることだろうか、ここで挙げられている集団行動が苦手とか、親友がいないなどは今の若者に当てはまる共通の事項ではなくて、大人にも当てはまるものなのではないだろうか。若者を批判するとき、このような批判の仕方はナンセンスである。例えば、電車の中でお年寄りや赤ちゃんを抱きかか抱えている女性に席を譲るのは女性が多い(特に若い人)。逆に、そういった人たちにサラリーマンが席を譲る姿を私は見たことがない。要するに、身勝手だとか思いやりがないといったものは個人の問題である。若者だから身勝手だとはならない。他人を思いやる若者が少ないからボランティア教育をすべきだという主張が仮になされているのであれば、理にかなっていない、おかしい考えと言わざるを得ない。

筆者の見解は、ボランティア教育はすべきであると思う。ボランティア教育は、子供たちにさまざまな「きっかけ」を与えるひとつの手段であるからだ。ある人はボランティア教育がきっかけとなってボランティアに参加するようになるかもしれない。またある人にとって、ボランティア教育は何も感じることもなく、ボランティアに興味を示す「きっかけ」とならないかもしれない。それでいいのではないだろうか。ボランティア教育を受けた子供たち全員がボラン

⁵⁰ 編者・遠藤克弥 『現代国際ボランティア教育論』 勉誠出版 2004年 p.130

ティアに興味を持つというのは、あり得ない。ボランティア教育をする目的というのは、人がボランティアに興味を示すための機会を提供することである。ボランティア教育は人がボランティアに興味を示す確率を高める作業といえる。

第3節 現代のボランティア教育

学校におけるボランティア教育

ボランティアは、第1章で述べたように、本人の意思が尊重され、自発的かつ(金銭面において)無償で社会に貢献する人あるいは行為そのものと定義した。そして、ボランティア教育とはそのようなものを学習するものとなる。

ボランティア教育は、学校、あるいは家庭や社会で実施することが可能である。(ここでは、家庭や社会でのボランティア教育については触れず学校におけるボランティア教育について論じる。)

学校でのボランティア教育はいわゆる総合学習によって成り立つ。総合学習とは、体験学習をメインとして複数の科目を組み合わせる学習活動である。

筆者は、学校のボランティア教育において、「道徳」と「体験学習」が中でも重要なものだと考える。道徳は、ボランティア、つまり社会貢献をする際、何が「善」で、何が「悪」かを判断できなければならない。その判断する能力を養う必要があるからである。また、体験学習は天野貞祐が著書「今日に生きる倫理」の中で述べるように「道徳性は暗誦だけでは養われない。実践に媒介されてのみそれが心身に染みこんで状態となり徳となることができるのである⁵¹。」あるいは「水に入らずしては泳ぎが学べぬと同じく実践なくして道徳性が身につく道理はない⁵²」と主張する論理に当てはまるのではないだろうか。何が「善」で何が「悪」かを知識として学ぶだけでは意味がなく、実際にそれらを判断する経験をすることで「善」「悪」の判断ができるようになるのである。

⁵¹ 天野貞祐 『今日に生きる倫理』 栗田出版会 昭和45年 p.40

⁵² 天野貞祐 前掲書 p.41

しかし、筆者は道徳という授業には少々問題があると考えている。なぜなら、生徒たちの思考能力を訓練する授業にもかかわらず、最初から答えの方向性が見えていると思うからである。道徳という科目は、筆者の経験からして、先生が生徒たちにどのような答えを求めているのかを生徒たちはそれとなく察知できる科目なのである。道徳という授業は、生徒自身が自ら考え、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることを目的としているにもかかわらず、方向性が見えているため、少し考えれば答えが導き出せてしまうのだ。このような道徳の授業で生徒が思考能力を向上させることは可能なのであろうか。このような授業は意味があるのだろうか。しかし、このような問題点が含まれているが、それでもそれは必要不可欠なのである。それは、生徒たちに社会規範を刷り込むという機能を有しているからである。

ボランティア教育は有効なのか

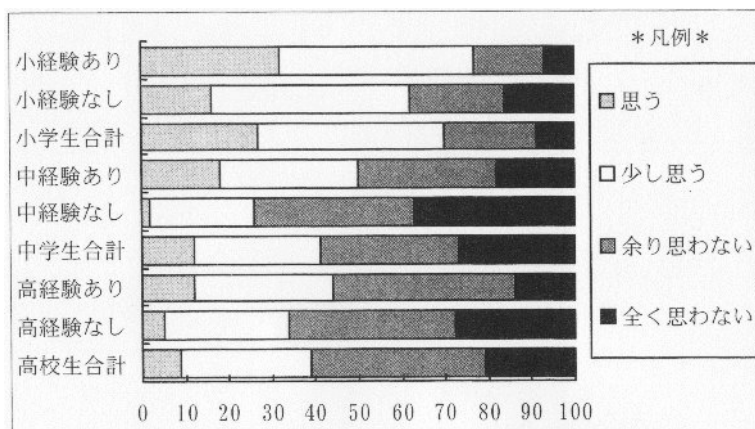


表 学校でボランティアの勉強をしたい (%)

(原出所)角田禮三編 『ボランティア教育のすすめ』 明治図書 2000年 p.99

ボランティア教育について、政治家や学者などのインテリ層が、熱心に議論している昨今だが、ボランティア教育を受ける側、つまり子供たちは、ボランティア教育についてどう思っているのでしょうか。ここに興味深い資料を提示する。

上の表 について説明すると、学校でボランティア活動について勉強してみたいと思いますか？という生徒の学習意欲に関する調査において、小学生では

「どちらかといえば勉強してみたいと思う」の合計が7割を占め、肯定的な答が多く、中高生では、「どちらかといえば勉強したいと思わない」と「全く勉強してみたいと思わない」の合計が6割弱と否定的な回答が多く⁵³なった。ボランティア活動の経験がある群とない群との比較では、肯定的な回答では経験のある群が高く、否定的な回答では経験のない群が高い傾向が⁵⁴あった。

この調査結果をどう解釈するかは人により異なるだろう。例えば、単純に小学生の大半がボランティアに興味をもっていることは喜ばしいとか、中・高校生に否定的な回答が多いのは、小学生に比べ受験などで時間に余裕ないからだという解釈も可能である。この調査結果を筆者は次のように解釈する。ボランティアの経験がある・なし、どちらも各層とも年齢が上がるにつれ、肯定的な回答より、否定的な回答が増加する傾向があるということがいえる。このことは、小学生が他の世代に比べ、ボランティアに関する学習意欲が高いのは、ボランティアをすることはいいことであり、した方がいいという「善」の観点から肯定的な意見を示しているからである。つまり、先生や親といった大人の影響を強く受けているためである。一人前の大人たちの言葉はその一つ一つが幼児にとっては、神秘的なまでに内容豊富なものに思える⁵⁵からである。自分の意思ではなく、一般的な道徳観念が反映され、それがそのまま小学生の調査結果としてこのように表れたのである。逆に、中・高校生で否定的な意見が多かったのは、反抗期や自我の目覚めといったものが現れるのがこの時期で、大人に対する反発や疑念を抱き、自分の意思というのを表明できるようになったためではないだろうか。つまり、小学生のころは、意思決定や行動する際、無意識に大人の価値基準に依存し、「善」・「悪」といった一般的な道徳観念にとらわれる決定する傾向が強かったのに対し、中・高校生になると自分の考えに基づき意思決定や行動を起こす傾向が強まり、ボランティアに関心がないという認識に気づくのではないかと思う。そのため、中・高校生では否定的な意見が多

⁵³ 角田禮三編 『ボランティア教育のすすめ』 明治図書 2000年 p.99

⁵⁴ 角田禮三編 前掲書 p.99

⁵⁵ シェストフ 上野修司訳 『善の哲学 トルストイとニーチェ』 1967年 p.28

いのではないだろうか。しかし、このような結果が出たからといって、全面的にボランティア教育が否定されるというわけではない。なぜなら中学生合計、高校生合計において調査結果が示すように肯定的な回答率と否定的な回答率との間にはそんなに大きな差がないからである。従って、ボランティア教育は有効であるといえる。

第4節 考察

近年、ボランティアの重要性が高まっている。国連もボランティアを推進しており「ボランティア活動推進国際協議会」(IAVE)は二度にわたり、「世界ボランティア宣言」を行っていて、1990年宣言では、ボランティア活動の定義、行動原則、行動目的を明らかにし、2001年宣言では、以上に加えてボランティア活動の意義を唱え、各国政府、企業、マスメディアなどの指導者に協力を要請している⁵⁶。ボランティアの推進は国際的な風潮といえる。ボランティアを広く普及させるために、ボランティア教育は重要な位置を占めているといってもいいだろう。

では、ボランティアを普及させる、すなわちボランティア人口を増加させるためには、ボランティア教育はどうあるべきなのであるだろうか。学校におけるボランティア教育も第2節で述べたように、人がボランティアに興味をもつ契機を設けるために必要なものである。また第3節では触れなかったが、家庭や社会におけるボランティア教育もまた重要なものである。なぜなら、学校のボランティア教育だけだとどうしても時間や取り扱う分野が限られてしまうため、限界がある。そのため、それを補填する受け皿が必要であり、それが家庭や社会といったものである。

ボランティア教育は本などの論調を拝見する限り、子供が対象とされているという印象を受ける。しかし、ボランティアを国を挙げて推進するのであれば、

⁵⁶ 遠藤克弥編 前掲書 p.38

子供だけでなく大人もその対象とされなければならない。なぜなら、大人つまり、家庭における親がボランティアに関する意識が高くなければ、子供がボランティアに興味を示す可能性も低いものとなるからである。家庭において親が子供に与える影響というのは計り知れないものであり、親の価値観がそのまま子供に反映されるものである。親がボランティアに理解を示していれば、子供がボランティアに興味を示す可能性も自ずと高められる。ボランティア教育において仮定における親の役割はきわめて重要なものなのである。また、家庭だけでなく社会全体がボランティアを支持する風潮を作る必要があるだろう。

つまり、ボランティア教育とは、学校・家庭・社会が相互に連携することが必要不可欠といえる。これは理想論である。まず、大人がボランティアを支持しなければならない。つまり、ボランティア精神を持っていることが前提となる。つまり、筆者自身もボランティア教育を推進するとするならば、ボランティア精神を持たなければならないということになる。

筆者自身、ボランティア教育とはどうあるべきか考えてみたが、以上のように理想論は語れたと思うが、現実味のある論理を考え出すことは現時点では不可能である。

第4章 偽善

この章では、なぜボランティアに対し、偽善的なイメージを持つのか。そもそも善とは何なのか、偽善者とはどのようなものなのかを考える。

第1節 「善」と「偽善」

「善」という言葉をなんとなく使っている人は多いのではないだろうか。「善」とはどういうものなのか人に説明する際、説明できる人はどのくらいいるのだろうか。「善」というのはきわめて、抽象的でわかりづらい概念のひとつである。なぜならそれは時として、「善」というものの中に、さまざまなものが含まれるからである。われわれは「よい」という言葉を様々な意味で用いている。われわれにとって役に立つもの、快いもの、あるいは確立された社会的基準に合致する行為、誰もが模倣すべきだと考えられる生き方などが一様に「よい」と呼ばれる⁵⁷。とりわけ、自分が属している社会に置いて確立されている基準や慣行への合致を通じて学ばれる用法は、この言葉の用法の核心をなすものといえる⁵⁸。つまり、「善」というものは、国の文化(常識など)の影響を強く受けるものといえる。しかしそれだけでなく、「善」という概念には、暗黙の了解とされている考えが含まれていると考えている。それは、「善」には崇高さや、美しさといったものである。例えば、ニーチェは「善とは全能であり、善とは総ての代りを務め、善とは神であり、むしろ善は神よりも高い⁵⁹」と捉え、トルストイは「善は我々の人生の永遠にして最高の目的である。たとえ我々が善を理解していなくても、我々の人生は善、即ち、神への志向以外の何者でもないのだ⁶⁰」と言った。また、第1章で触れたように、キリスト教の「隣人愛」や仏教の「慈悲」といった宗教的なボランティア精神あるいは「徳」といったものである。人間は「善」そのものを美化する傾向があるのではないかと思う。例えば、善いものとは、「正しいという性格をもつとされた愛」⁶¹というような類のものである。個人レベルにおいて最善であるものが、さらに家族、友人職場、地域社会、国家、人類へ、さらには遠い将来の人類にまで広がってゆくなれば、それははるかに善いこと⁶²であり、この広大な全体の中で可能な限り善を増大させること、これこそ明らかに一切の行為がそれに向かって秩序づけられるべき人生の

57 九州大学哲学研究室編 『行為の構造』 勁草書房 1983年 p.16

58 九州大学哲学研究室編 前掲書 p.16

59 シェストフ 上野修司訳 前掲書 p.168

60 シェストフ 上野修司訳 前掲書 p.160

61 九州大学哲学研究室編 前掲書 p.71

62 九州大学哲学研究室編 前掲書 p.75

目的なのであり、ほかの一切の命令がそれに従属する唯一至上の命令なのである。献身と、状況によっては自己犠牲もこれによって義務となる⁶³。特に、ボランティアといった「善」の行為にはこういった美意識が付きまとう。「善」には、付加価値がついているのである。

一方、「偽善」というのは、読んで字の如く「本心からでなく、みせかけにする善事」(広辞苑より)のことである。「偽善」という言葉にたいていの人間が嫌悪感を示す。筆者は、「偽善」という言葉こそ、人間の本質を突いていると思う。例えば、子供が親や先生から誉められたいために、お手伝いすることである。つまり、ある人から好かれたいため、見栄を張りたいためにやる行為である。これらの行為は外面的には、「善」の行為と捉えられる。しかし、内面的には「偽善」の行為である。例を引用すると、親や先生の立場からすると、「お手伝いをしてくれた」子供の行為を善いことと評価できるが、子供の立場から解釈すると、子供の行為は「偽善」と捉えられる。つまり、「善」か「偽善」かという判断するのは行為の主体、すなわち子供なのである。「偽善」かどうかは、客観的には判断できず、主観的な判断に委ねるしかないのである。

「偽善」には、エゴ(利己的なもの)が付随する。そのエゴイスティックな部分が行動の随所に垣間見られたとき、人は不快な思いをする。なぜなら、それが人間の持ついやな部分であることを認識していて、自分自身もそのいやなものを持っているからである。なぜ、人間はエゴの要素を取り除こうとするのだろうか。エゴを捨てられる人間など存在するのだろうか。エゴを捨てることは不可能である。そう簡単にエゴを捨てられるわけがない。エゴはたいていの人間が持っているものである。だから、「偽善」というものを卑下して捉える必要はない。「偽善」的の行為こそ、人間らしい行動といえるのではないだろうか。

第2節 ボランティアは偽善者なのか

⁶³ 九州大学哲学研究室編 前掲書 p.75-76

よく、ボランティアを批判するとき「偽善者」という言葉を用いる。「偽善」を用いる例を中田の本から抜粋しようと思う。

「関西のある大学で非常勤講師をしていたとき、学生たちに『私たちは、ボランティアとして他者や社会の問題にかかわる必要があると思うか。またその理由は何か』というテーマでレポートを書いてもらった。提出された200通あまりのうち、条件つきとやや消極的な肯定意見を含めて『必要あり』と答えたものは八割以上に上った。しかし、大半の学生が理想的には必要と考えている反面、現実には何もしていなかった。そのような学生たちをボランティアへの参加を躊躇させるネガティブなイメージとして最も多かったのが、『ボランティアは偽善的』だった⁶⁴。」

筆者も用いたことがある。では、このように批判する側は「偽善者」ではないのだろうか。ボランティアに従事する人間が「偽善者」で、ボランティアをしない人間が「善人」なのか。そのようになるはずがない。「偽善者」がやるようなことができないやつが、「善人」であるはずがない。では、ボランティアをしない人間は「悪人」なのか。いや、そんなはずでもない。ボランティアをしないだけで「悪人」呼ばわりするのもどうかと思う。結局、ボランティアをする人もしない人も「偽善者」なのではないかという結論に至る。そうなると、ボランティアを批判する側の批判の仕方として、「偽善者」という批判の仕方は的を射ていない。

「偽善者」と非難されることに抵抗を感じるのは、ボランティアだけでない。たいていの人にとって抵抗を感じる。現に、筆者もそうだ。「お前は偽善者である」という指摘が、誰にとっても我慢ならないのは、私たちが、自分は偽善者であるという事実から、おたがいに目をそむけようとしてつとめるからである⁶⁵。

この世には、完全なる善人も完全なる悪人もいない⁶⁶。すべての人間は偽善者である。人間は、何が自分にとって有利か不利かを考え行動するものだ。つ

64 中田豊一 前掲書 p.23-24

65 福田定良 『偽善の倫理』 法政大学出版局 1967年 p.10

66 中田豊一 前掲書 p.105

まり、物事に優先順位をつけて行動する。それは時として、自己を他者よりも優先させることがある。例えば、自分がとても急いでいるときである。人は特に、精神的に余裕がないときに自己を他人よりも優先させるのではないだろうか。では、ボランティアは自己を他人より優先させたことがないのだろうか、見栄を張ったことがないのであろうか。いや、あるはずであらう。つまり、ボランティアも偽善者なのである。

前項でも述べたように、完全にエゴを取り除ける人などいない。いたとしても、限られた人だけだろう。何度も言うが、すべての人間は偽善者なのである。

第5章 終章 - ボランティア精神とは何か -

各章で考えてきたことをまとめ、筆者にとってボランティア精神というのがどういうものであるか、ここでひとまず答えを出したいと思う。

まず、宗教にもボランティア精神が見出せた。「隣人愛」、「慈悲」、そしてイスラムのサダカート、いずれも、自助の精神というべきものが共通しこの精神は、現代にも通じるものがあるといえる。

しかし、現代におけるボランティア精神は根底にはこのような宗教的なボランティア精神が内在しているが、さらに複雑なものである。人の価値観が多様化しているからである。人あるいは、状況によってボランティア精神の中身のバランスが変化する。例えば、ある人は、ボランティア精神を純粹に見返りを求めないものと定義し、またある人はそれをもっと身近で気軽なものと捉える。状況によってボランティア精神の中身のバランスが変化するというのは、例えば、心の傷を持つ子供を自立させるボランティアと環境のボランティアでは根本的にボランティアに対する捉え方が違うのではないだろうか。また、学校におけるボランティアの義務化に賛成する人、反対する人で分類される。これがボランティア精神であるという万人が納得する定義づけが非常に困難なものである。

筆者には、ボランティア精神はないと思う。まず人間嫌いである。ボランティアに携わりたいと思ったこともない。そのため、ボランティアに価値を見出す人がなぜボランティアにそこまで魅せられるのかわからない。その理由は人によって異なるものだと思う。楽しいから、自分の住んでいる地域を良くしたい、人助けができるとか、知らない人と交流がしたい、たまたま環境問題に興味があったからとか、自己革新したかったからとか、さまざまな理由が考えられる。

筆者は、ボランティアをしたことがないといったが、ある友人は、「電車の中で、席を譲るのはボランティアなんじゃないか」と言った。筆者も、電車で席を譲ったことぐらいは経験がある。それがボランティアであるなら、筆者にと

って、あまり心地いいものではなかった。ありがとうと感謝されるのは理解できるが、筆者自身、感謝されると案外恥ずかしく思ってしまうのだ。「ありがとう」と言われた後、どのように振る舞えばいいのかわからない。いつも筆者がやる行動は、その場から立ち去ることである。基本的に、筆者は人から褒められたいとは思わない、逆に、怒られたいのかということとそれも違う。筆者は、褒められることにも怒られることにも慣れていない。仮にいいことをしたとしてもそっとしてほしいと思うのである。その後の対処の仕方に困るからだ。

いつだか定かではないが、テレビでクイズ番組を見ていたら、福知山線の脱線事故の遺族の人に獲得した賞金を寄付すると言っている人がいた。その人は、あの福知山線の脱線事故で、事故の当日、あの脱線した列車の乗っていたのだという。その人が語るには、乗客で幸いたいた怪我を負わなかった人は、ほとんどの人が現場に残り、救助活動をしていたらしい。この話を聞いて、筆者は困っている人がいれば、誰しも助けようと思う心はもっているものだと思う。ボランティアを積極的に行わなくてもそれはそれでいいのではないだろうか。

ボランティア精神の本質は、相手の立場を理解するということではないだろうか。ボランティアに従事している人は極めて、受身的だということかもしれないが、自ら、困っている人のもとに駆けつけ、その人の役に立つといった、積極的なものでなくてもいいと思う。自己犠牲や美德意識などという鎧を脱ぎ捨て、道端を歩いていたら、困っている人がいたらその人が今どういう状況にいるのか理解し、助けられる範囲で助ける、そのような流れに身を任せ、軽いものこそ、人間的なボランティア精神なのではないだろうか。

おわりに

今まで、NPO やボランティアは必要だが、筆者自身はそのようなものに興味がないというわがままな、ダメ人間の戯言に付き合っていたいただき心から感謝したい。筆者の主張を聞いてイライラされた方も当然おられると思う。しかし、筆者は卒業論文にこのテーマを選んでよかったと思う。なぜなら、このテーマを選ばなければ、ボランティアについて考えようとも思わなかったし、なぜ自分が興味ないのかという自己分析をする機会もなかったと思うからである。

現時点では、ボランティア精神とは以上のように筆者は捉えているが、今後、また考えが変わるかもしれない。また、ボランティアとは、人によって定義が異なるというのを改めて感じた。すなわち、ボランティアという言葉は、非常に使い勝手がいい反面、白黒はっきりしている言葉ではないのである。

筆者自身も、いつか何かの縁でボランティアに従事するようになっていくかもしれない、そんな可能性がボランティアにはあるような気がした。また、これからの日本社会を考えると、それがボランティア活動という形をとるのか、奉仕活動という形をとるのかかわからないが我々は何かしらの形で社会貢献に携わらざるを得ないのではないかとも思った。

最後に、ゼミの皆様にはさまざまな助言を頂き、非常に助けられた。また小関先生には、最初どのようなテーマを選ぶべきか相談しに伺ったところ、「自分のやりたいことをやったほうがいい」とおっしゃっていただき、筆者はこのテーマを選ぶことを決心した。この論文を書いて行き詰った際、違うテーマに変えてしまおうとしたことが何度かあった。しかし、先生のあの言葉を支えとし最後までこのテーマに全うすることができた。また、筆者にはない考えや発想を提供してくれた友人たちに感謝の意を表しこの論文を締めくくりたいと思う。ほんとうにありがとうございました。

参考文献

- 田川建三 『キリスト教思想への招待』 勁草書房 2004年
- 増谷文雄 梅原猛 『仏教の思想 知恵と慈悲<ブッダ>』 角川書店
1968年
- 加賀谷寛 『イスラム思想』 大阪書籍 1986年
- 監修・岡本栄一 『ボランティアのすすめ』 ミネルヴァ書房 2005年
- 編者・遠藤克弥 『現代国際ボランティア教育論』 勉誠出版 2004年
- 中田豊一 『ボランティア未来論』 参加型開発研究所 2000年
- 角田禮三編 『ボランティア教育のすすめ』 明治図書 2000年
- 天野貞祐 『今日に生きる倫理』 栗田出版会 昭和45年
- シェストフ 上野修司訳 『善の哲学 トルストイとニーチェ』 1967年
- 九州大学哲学研究室編 『行為の構造』 勁草書房 1983年
- 福田定良 『偽善の倫理』 法政大学出版局 1967年
- 資格試験研究会編 公務員試験「速攻の時事」 実務教育出版 2005年
- 森口秀志編 『これがボランティアだ!』 晶文社 2001年

http://www.opief.or.jp/055_education/book03.html (2005 / 11 / 22 アクセス)

<http://www.os.rim.or.jp/^nicolas/gakkoukyouikutoborantia.html> (2005 / 11 / 22 アクセス)

<http://www.nuis.ac.jp/^h.sasaki/ngo/column2002/c-arai1.html> (2005 / 11 / 22 アクセス)

<http://www.interq.or.jp/sun/taji/columnborantia.htm>